怡野集

雜中

土岐文庫
文庫17
W46
11

文庫 17
W46
11

述懷　聊述懷　寄天象述懷　寄日述懷　逐日述懷
月前述懷　對月述懷　寄月述懷　寄星述懷　風前述懷
寄風述懷　嵐前述懷　寄嵐述懷　雨中述懷　寄雨述懷
寄雲述懷　寄霧述懷　寄煙述懷　寄露述懷　寄雪述懷
寄霜述懷　夕述懷　薄暮述懷　曉述懷　寄曉述懷
夜述懷　春述懷　夏述懷　秋述懷　冬述懷
歲暮述懷　寄木述懷　寄埋木述懷　寄朽木述懷　寄花述懷
寄松述懷　寄竹述懷　寄篠述懷　寄草述懷　寄鳥述懷
寄虫述懷　寄山述懷　寄森述懷　浮田森述懷　寄國述懷
寄遠國述懷　寄閑述懷　寄橋述懷　寄道述懷　寄水述懷
水辺述懷　寄河述懷　寄海述懷　寄浦述懷　寄濱述懷

昭和六十年二月一日
吉田文庫
贈寄
010185194952

寄瀬述懐　寄瀧述懐　社頭述懐　寄神祇述懐　寄神祇述懐
故郷述懐　山家述懐　寄里述懐　閑居述懐　寄市述懐
獨述懐　老人述懐　老後述懐　寄老述懐　寄老人述懐
寝覺述懐　寄身述懐　寄情述懐　寄心述懐　述懐言盡
述懐非一　述懐涙　思行未述懐　寄玉述懐　寄鏡述懐
寄匣述懐　寄弓述懐　寄鐘述懐　寄衣述懐　寄絲述懐
寄灯述懐　寄酒述懐　寄塵述懐　寄貝述懐　寄田述懐
寄稲述懐　寄菓述懐　耻運述懐　寄門述懐　寄世述懐
寄歌述懐　寄書述懐　寄舟述懐　舩中述懐　寄滅盡述懐
寄筏述懐　旅中述懐　行旅述懐　名所述懐　夢中述懐
寄夢述懐　羅述懐　聞法述懐　就法述懐　懐旧

月催懐旧　對月懐旧　月前懐旧　寄風懐旧　風前懐旧
寄嵐懐旧　寄雲懐旧　夜懐旧　寄雨懐旧　雨中懐旧
寄露懐旧　春懐旧　夏懐旧　秋懐旧　冬々懐旧
寄花懐旧　寄松懐旧　寄杉懐旧　寄橘懐旧　寄忍草懐旧
寄雀懐旧　寄珠懐旧　對泉懐旧　寄水懐旧　池辺懐旧
寄川懐旧　寄滝懐旧　寄江懐旧　寄橋懐旧　寄山懐旧
寄野懐旧　旅懐旧　懐旧時々　懐旧非一　老後懐旧
獨懐旧　寄世懐旧　懐旧催涙　懐旧涙　寝覺懐旧
寄夢懐旧　夢中懐旧　寄舟懐旧　寄鏡懐旧　山寺懐旧
寄里懐旧　名所懐旧　故郷懐旧　寄物　神祇　梯
煙　物語　書　昔　往昔

披書逢昔　未忘昔意　遇友恋友
往事催涙　忍昔　對月忍昔
憂喜同夢　夢談故人　世路如梦
曉寢覺　草　忘草
麥門冬々　日蔭草　庭苔
苔爲石衣　萍　芦
藻　竹　窓前竹
竹不改色　竹久緑　竹遐年友
囲篠　路篠　木
山松　名所松　高砂松
社頭松　松風　松風似雨
思往事　老後思往事
月前思往事　夢
往夷如夢　往夷皆夢
忍草　月草
巖苔　山路苔
江芦　濱邊芦
竹風似雨　竹風
松竹　篠
松　庭松
三影松　故郷松
松風調琴　松濤
松煙　山下松煙　松臨池
海邊松　磯松　浦松
江松老　松老澗底　松花十廻
松君閑友　松作千年友　松契千年
松經年　對松爭齢　古松
榊　山榊　嶺榊
ほうがい　椙　椿
栽桂　橘　ぎりの木
鳥　河邊鳥　海路鳥
鶴　朝鶴　夜雇
池上雇　江上雇　海邊鶴
池上松火　松枝映水
鳥松　岸松
松不改色　松爲友
松契多年　松契遐年
松薪　松枯
杉　柏
櫻　檜
水樹多佳趣　浮木
寄鳥離　放鳥
鶴聲近　雲居雇
海邊見鶴　海邊冬々雇

浦雁　浦雁鳴月　湖邊雁
河上鶴　鶴立渕　鶴鳴皐
鶴宿松樹　鶴契遐年　烏
鶏　鶏告曉　曉鶏
鷲　鷹　鳩
虎　牛　馬
猿　鼯　蛭
鯛　鄭　鮒
拾貝　亀　柳調 ミヨギ　日調 ヒヨギ　刀
宴　盃
琴調　和琴　琴

澤雁　澤辺雁
島雁　葦間鶴
都鳥　鷗
曉更遠鶏　鴟
鶏　鷺
羊　熊
蜘蛛　鼠
鮎　貝
藥　酒
弓箭　琴
管絃　笛

鐘　曉鐘
薄暮鐘　寤鐘　遠鐘幽
勅學文　文書　本
法服　袈裟　羽衣
鏡　鞠　簾　御
袋　碁　枕
瓶　鍋　玉
閑中灯　画　東
船　船路　海路舟
河舟　古渡舟　舟過蒼間
仙川筏　河筏　釣
行舟夜已深　筏
釣魚　釣舟

漁舟　漁舟火　漁火連浪　漁舟連浪　遥望漁舟

暮漁舟　眺望　夕眺望　朝眺望　漁上遠望

海上眺望　海邊眺望　浦眺望　船中遠望　海路眺望

雲海漫々　河眺望　湖上眺望　野徑眺望　遠山眺望

峯眺望　月前眺望

帝室図書寮

述懐

龍之祝中

万古　たれこそはむかしこゆべき世なれてこそ　恬良
　　たれこそは命まつまれどけうき事ぞくるしきすべ　久文
同　山川の春ふかきくるしきをみるあるよりはれ　いせ
同　家分うらうきぬの中と歌きつ人は落さ船うるうん　実人寺
後　世は中はうきそれ忘れ人ごのとふとふきこえ　愛之
同　分はよくあるを拾はぬごと春ふ浦せぬものたんこそう　以勢
同　見てこそ小あくさ世は中とおどろ船といたそこそ　続人ふね
同　伝ひびねとは浪うと山里ふたまぶこるべき君をとめて　業平
拾　世は中はかきりのと世しんどたきこと社久しうん　馬見ふ
同　のりのこと通ると人の命ふれ世きたてぬれ家ひるよ　菅原太政
後拾　春ふるぬ分れうきことは世中ふ命きこうちふぐよいらぬ　小野
新　行末のいのちへぐらる春の月日よ命ぐぐらまし　政平

チ
久汁浮世ハ中河のごとく流れさるこの身はなるこ　和歌
同　ながそののあらぐるとまちかんいとひ安さこそ身の分也ける　吉覚法聖
同　かぞへつるこゝハとせ〳〵ふるり　右大臣
同　春日山松ふ雪のふるくるるいき藤の末葉の数かゝるゝどし　そ行
野ちの道ハ家分のとゞまれとむれど雪ハ　行家
同　うしといそ世ハくすふそむるゝ　行家
同　お殺て世ふる方ふとあるゝたゝのうねすちふつこそ　定頼
同　同じくもあれかたへ思ひ出のあれどそ思ひ出　慈円
同　いたゞ我ゝふの星ハさびまふあるゝとゝ　寂蓮
同　ふるゝゝど世ハそむうんといへ人の目ど数ふゝれ　同
同　軒ちそとり家ともまち人やゝるる月日ハ数ぞるゝ　り通
同　家ぐ月ハ先極ふてはれかぐちゝ知ぬ居むうてん　源信
同　命ぐゝ行　ふまわゝべゝちゝぐよ方ハそてゝ思ぐん人の数ぞ　ぐ
同　ふゝ我ゝの秋ふ嵐ゝ至てちゝねゝちぐ月ゝとゝるゝ　家隆

物
世ハ中ハかど大和ゝるみかゝ川ゝ数ゝ　よみ人
同　あゝるゝぐふ世のうきゝ世ハ思ゝ数せ　同
同　数ゝ家ふハ数ゝ家ふ数ぞ　加茂法師
同　初中ゝ思ひそ月ハ世ハ中ふ何なゝるゝ　り通
六　ゝゝゝふいゝゝゝぐゝ世の世ハ中ゝ　ふゝ清人
代　後ハ世ゝ我ぐゝ身ぐゝ　蓮性
同　人ゝれずゝのうゝれゝゝきゝ　寛平御製
同　ゝゝのゝきぞふかゝくゝ世ふ　紀貫
同　ゝむゝ惜まれぬ色ゝ世ふ　西行
同　そむまふ中ハゝゝゝ世ふ浮世ふゝてすみぞめのゝぞ　小侍従
同　何ぐゝまゝゝふなぐゝ　既王ゝ光
同　うき分まぐゝれゝゝる世ハ中ふ何のあゝゝてめゝゝ　典侍
同　青ゝうゝれゝゝきゝ思ゝて分ゝなきふゝ　伊勢
同　あゝゝ社ゝまふゝなきゝ世ハ中ふいふとすゝゝ家分ゝゝ　

代
同 うづらと恨すてつるなきかたどうまれんこの秋のこさは　定家
同 かへしつる月日はへぬる世中ふる雁きかをうれいの海　西宮前左
同 何のとうとといつたん大うち世のあつい秋きまりそれ　右近
同 秋ぞうの家にふりすてられて世ふさすふる分をいとふ　家俊
同 数あるでをこ一人をもとかとみよりて秋うき分をうら　禪性△
同 苔ふる浮世の中をいかしてどうこの家の名ふでそなる　大納門院
同 こゞ分ふりきふる拍をうきこの人のことをもうるふる　小町
同 世中よりるをあまをもれとハ雁うたんのうたん　權大夫
同 世の中ふあるうあきこふなれる分をとうね恨ハ家で増れる　清実△
同 すてはきこんをあまをるなのうていとうて思ね我分あるうん　基平
同 ゆうるね命うれどをんふりてまうをうれねを浮世ふそなる　い世
同 ふいるんれハ思れどうをたうこふ拍でそれうき　雅経
同 ちあどういうそで拍ふりてきふてをうるね分とかふて光　
同 うき分をどいとひあうこいそかをこ世のこふをいすつ　

聊述懐

代 おもはるゝ心のやみはまよひつゝうき世にめぐる我身なりけり　為家

同 はかなしなうしとも身をばなげかれず今は哀身のなれるすゑかな　信光

同 世の中をそれむかしとはおもはねどうきみのうたにまさる身かな　よみ人しらず

同 藻塩くむうらまをつるとせしかどかやぞ深くしあづねたる　基信

同 すぐしけり山の奥にとおもふ身のすまれぬ物はこの心かな　基氏

同 一すぢに思ひ定むるべくにあらずうきに世をなげきつゝまし　宗実

同 いとふどもそむき果ぬるうき身世にかれてもえたえたらむ　宗将政

同 さだめなき世のうらめしさへうきぬとは絶えたゆる我身かな　伊光

寄天象述懐

同 はかなくとさすがなくて心るいつをとおもふも世なりけれ　忠良

拾 前のこずゑ桂のたをりかしかりの林にもいりぬむ　後生

金 なにはえも月をこそ深し心とは日をまつ我身かな　覚子

新 うき世にはいづる日かげにいとはしくもまた月の入るかな　宗倉

勅 ちかまつる心のこゝろくてとつをかるやまぞすれ　通綱

代 よりすむ世もそむかむ大空のかげのみぞ消えぬ　慈鎮

寄日述懐

金 日の光わまりゆきこえつきこゝに我身ひとつへかくれにけり　雅兼

新 この原なかさしける光にいづれの沼もさえ猶もるべき　基俊

続 日の光てらし捨つるうき身にはくらきこそ猶まよふなれ　清輔

古 きえぬともいひたえと嘆きし我身川なかれて果ぬ月日也　よみ人

後 我なからに世のうきことは思ひつゝながめせしまに年ぞへにける　土佐

代 月日のみかすかになくてわすれねば年くらすべき身のゆくへかな　後京極

遂日述懐

続 わすれじとおもふにつけて心をぞ思しく嘆くるにもなく　俊恵

後拾 あはれとも浮世にかからむ思ひつるべき秋の月かな　三条院

同 かたにえ月かんとしとしのちどもらぬは光ぞかなしかりける　為信

詞 汚れなる月はそれなからて詠る人の心ぞかなしかりける　小一条院

同前述懐

千 待なく哀世ふるねとおもふにかゝる月にすむ心かな　堀川

代 後になげきおつる後の家ちさね月のうらめしきまで　為家

同 うき身をいとひながらもよそなれ月を詠て年のへぬれど　為経

同 世の中のうきにつきてもかゞむれど月をみるまに夜ねぬべきかな　大輔

對月述懐

後拾　かくむれど月さへまねく出でし此世の頼もしからぞなく　源覚

千　数ならぬ身にも心のありがほに独りも月をながめつるかな　桂少将

代　さらずとも人に知られぬ身なればや月にむかひて恨みけるかな　教政

同　山の端の月と共にやいそぎして浮世にめぐる影も哀しか　実家

六　秋の月ひとりあはれとながめつゝ涙やそへてぞみる　いせ

新　ふりすてがたき人のなごりをありしかど見し月ぞさやけき　慈鎮

寄月述懐

同　いかにしてしばし世に又たのみかぜしいとほりこそあれ　同

同　月をこそながむると云ひしまます鏡めぐりあひてぞ照らしけり　兼経

同　更にある秋の夜ながの空ほどにほとなく月のかげぞさやけき　為行

代　身は果てと心に色てむかしなきには又ぬる山の端の月　隆家

同　いたをしかはでて月をなてしらんを山にかくる身をいかにせむ　定家

同　限りありてむかしにかへる世の中にさ又かの月をいつまでかみん　いつきの女

同　今はもう月に縁めでもかはらぬ心はくもりなしとぞする　後徳大寺

同　いたづらに影ふけて月を又ながめんと心をまみせいかにせん　如願法師

寄星述懐

同　かくむれど身のうきことのおほかるをかはらずも月を見るらん　俊恵

拾　わすられし身はさまよふことの世にありとゆるさるゝ　兼経女

風前述懐

後　世の中はいかにせむいかにも風の音は秋に枕をそふる身　よみ人しらず

同　よの中もいさといさやの風の音は秋に秋そふものにぞありける　いせ

寄風述懐

古　ちるぞかなしき世をいとへ世中も波のおとづれに風ぞしくめる　今成

嵐前述懐

千　数ならぬ身をうき雲の晴れねばさすがに家の内ぞくるしき　源尚

寄嵐述懐

勅　わくらばに風ふきまよふ身をなむと待たれども心にかよふあらしなる　後京極大臣

代　ともし火の光のこまでおとせよとめでずらしとふ心ぞ　宣氏

雨中述懐

新　世の中に秋はそねむ松にも今はわらはの声を乞ぞする　経光

後　めでせずさぎことのはみをを見くる嵐の思ひ心やらん　ふるさと人

新　縁めでて家にのことぞしのびにわれの宿の窓をもる雨　興平

寄山述懐

代　絶え入りきつきつの山の何をもしさしまだまあるなる涙あれ　為家

拾　心あらぞ見る人に家家のうへ浅茅が原とするぞ悲しき　兼香殿女御

詞　三笠山さすがにかげまくらへて見るらむともまちかねのなれ　仲正

夢雲述懐

夢雨述懐

寄烟述懐

夢霧述懐

夢虹述懐

夢電述懐

夕述懐

薄暮述懐

曉述懐

寄暁述懐

夜述懐

春述懷

夏述懷

秋述懷

初 六月の花を見て月を行末を見てぞしる人のあき　定信

続 はかれさかりのどろかぬぞ色よりは秋ものの秋をこそしるべき　仁覚△

代 もゝ草の花咲ぬ秋よりこゝぞ涼世のいとゝあはれなりけり　小宰相

後 花ゆへ見て秋をしるかはすぐしたるかはうる分いすぐしたるかはう　雅正

初 春ゝくる花やさくらもちぐらき若木の花ある枝末の分を　とゝよし

同 数あるべき春をもちまつみ山家の人ゝや若ふうれ果ぬ人　後宗教

于 ゝゝつゝのあま分れずいかとゝぎす鳴ぬ山のりまのを　摂政家

代 ちまれこずもゝ花を数果ていと人孫で枝ふ花ぐれる　土御門院

同 まゝこと枝ふりゝるゝ天月の花ゝ春ゝ涼とゝゝり　小倉内侍

後 秋緑ゝ葉づく秋をゝこぐらふわまゝこゝゝ若ゝゝふる　業之

于 分のうゝゝ秋ゝゝゝ花ゝゝ涼ゝゝ月ゝゝゝ　教輔

同 秋ゝゝゝ緑のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　輔仁親王

野 花ゝゝゝ葉ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　久我太政

同 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　武平

紅葉述懷

寄木述懷

六 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　ゝ知流人

続 人ゝゝ若花咲ゝゝふわゝゝ花ゝゝ我のゝ秋ゝゝゝゝゝゝ　寛雅

同 いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　俊宗

初 春日ゝいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　俊宗

代 秋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　ゝゝゝ

同 分ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　季経

同 奥山のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　藤成ゝ

古 樺ゝはる花ちるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　莫谷

同 とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　後人ゝ和

代 うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　宣旨

古 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　後人ゝ

後 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　家隆

同 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　後太政

同 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　ゝ

寄埋木述懐

寄朽木述懐

寄花述懐

寄松述懐

寄竹述懐

寄篠述懐

寄草述懐

新　小笹原風まつ露のきえやらずこのひとふしを思ひおくかな　俊成

古　侘ぬれば身をうき草の根を絶て誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ　小町

同　大あらきの森の下草老ぬれば駒もすさめず刈人もなし　読人不知

同　いくよしもあらじわが身をなぞもかくあまのかるもに思ひ乱るゝ　同

後　大あらきの森の草とや成にけんかりにだにきてとふ人のなき　忠岑

同　人しれず侘ぶにあらし大あらきの森の下なる草乃身なれど　みつね

拾　植ずみる花ねぞあらぬ大あらきの森の下なる草葉わけつゝど　同

後拾　並べて咲白ぎくは八重くの花のしもとぞ見え渡るかな　公任

同　捨はてんと思ひしかどもかつかくて浅ぢが末によはなるらん　和泉式部

同　草の葉のなびくよまぎらはず露の身のおきどころなく歎く比かな　よみ人しらず

金　難波江の葦のうきねのしげれどもゆかぬ舟せぞする　六条右

同　せき入れておとしぬ瀬の川水をまかせんと身のうき草はなかれさるらう　中ゝ山

千　世の中は思ひ果ぬと人はみよかくてあるべき秋の夕暮　よ空

新　霜ころは今は秋なれど今はよそにもきく虫の声　海泉院

寄鳥述懐

新　ながれ芦のうきさそはみさしまはにに住とふむべき心地こそせね　忠ら

同　世の中にわきてはかなく身にかゝるのまゝのよそにのみして　泰時

六　秋よしやよそにかゝる根なし草たゞれのとまりなさ身のとまり　読人不知

同　つゞせこがねゆるが浮さらでは池のすみかに衣ぐれ刈あかさん　貫之

続　たら波のよすればなびく葦の葉の浮世の中は離からなん　雅忠

後拾　うれがたはさぞなみまつ浮草の絶えぬ君かたづねん　兼仲

拾　さればつくる思ひ絶よしの身の世を思ひ出へあし

万　くさかえの入江にあさる蘆鶴のあなたづたづし友なしにして　大伴卿

同　世の中をうしとやさしと思へども飛たちかねつ鳥にしあらねば　憶良

古　葦たづのひとりおくれて鳴声は雲の上まで聞えつがなん　千里

後　ゆくしくの山しゝとよみなくしかも宿もさだめず絶ぬものかや　山田

拾　ほどゝ身は家のみと思へどもよそにあるらでも秋ぞ鳴なる　頼基

後拾　沢みづにおりゐるたづは年ふれど老も忘れぞなきかなしき　兼仲

新　友つ風ふく浦のうらにあるたづのねざし手に袖ぬるゝらん　俊恵

寄虫述懷

寄山述懷

寄森述懷

濱田森述懷

寄國述懷

寄遠國述懷

寄關述懷

寄橋述懷

寄道述懐

寄水述懐

水邊述懐

寄河述懐

寄海述懐

寄浦述懐

寄濱述懷

代 けだものの浦ふく濱の名所なれば（宗于）
ふる郷人
千 ふきて風の吹くに浪たつ濱とぞ思ひ果ねとはかなく読（後京極）
俊定
寄瀬述懷

千 せせのうちにつむときけど淺川ぞ流れてもなほ絶ぬ（惟方）
野 萬とよぐちぶの浦のいろをこそうたのかふうび濱なん（約基△）
代 在名川なせの淺ふ吹風のいろづくふのみ紅月日れ（建保御製）
寄滝述懷

伝 滝たせのうづまきごとかとめんれぞ程ふくる世のうき舟（ちみ人後）
千 大井川とあせの淺ふ分をぞたどとへ人ないぬてゆかい（定仁△）
野 我せをぞ分ふかすとなるものの淺のふといだ出るなる（りの京）
社頭述懷

千 さるをれと祈をれを神ぐ祈ぐをしくなれるものうづき（武平内）
同 君ぞいのる祈しれをふかうまとけいづちの神をうづ神（定保）
同 とをふかどをづむしんきづ川をぞめうまに神祈祈り（安宣）
野 ひとをしてうき祈をのこさは洗のうるせてうき分をいふ（同時内侍）
同 皆人のをむうき果ねる世中ふかるの祈り身をいふ世幸をん（女御）

寄神述懷

詞 うくてのこよふを明けすうづ神をくしたよ天ぐる神（ちみ人後）
千 我しのむ日ちに新を奥ふの葉の石まぢをさうづ（恭仁△）
新 歌牧む七の祈乃ゆ歌ぞすきうををしふのをかすする（同）
同 ゆ川ぞ歌をの新を分をうをねる流あ中を祈るをうを（同）
寄神祇述懷

代 かくうづる人を者をを神ををををををふすみをの神ぞ知ん（みち子）
同 うきうきをの氏ふふ歌ずい神中を人祭ををこす分をあ（増基△）
同 ふをとふ神をみあるむをうをを人をををふかをををとを（仁俊△）
同 伯古をすづををを神代より歌ぞをしづむ人ををををと（基俊）
同 ちをき波ふ者のみををうを伯をの祈りを今ふをひすをうん（後成）
故郷述懷

古 人をるす里をいとひををふををををををををををををを（二條）
代 うづをうきむのうをかとみし祈を波とをふこをれぬれ（後法師人ふ和）
同 歌をを石と波とる里の歌のうをを出をうきを（為定女房）
後 白をのきををる墨を小祈祈をしをれを日を先をを（廣秀）
山家述懷

同 世を中ふいとをひををふをを分をうをの山ふを祈る（ちみ人後）

喜里述懷

南居述懷

寄市述懷

獨述懷

老人述懷

老後述懐

代 それをみなわがつ家かたの思ひ出ありなかくて年のへにける　知家

同 とふ人もなきとはいへど社いひせし我家をぞ秋と葉るれはく　清少

古 何やして身のいたづらに老いぬらん年のおもはんことぞやさしき　読人不知

後拾 まつらこのかとも人の思ふらんはかなくあらで老ぬる身を　兼輔

六 後に老まさるらんまつの家かの思ひかもらん　貫之

代 ヒトしれぬ我思ひをばかなはぬかなは恋て此世なれども　俊宗

同 さりともと恨みすゑの世はみこしてのちえし宿て色は　はるけく　禅性

後拾 我身なからの誓は神々の国にとりてかすめてさ　寂然

新 後に色ましとや歎かれんうらぐれき身の夕ぐれの空　慈鎮

寄老述懐

千 いたとそれ身のなきをはかなしもど昔は老は数やはと　顕国

同 おのづからありせば世になからへて惜むと人に見えねば　定家

代 老の後まぎらはするいなれ物と人の心はあかくに　前摂政

後 たれねられよのなかに数つくはかげにおける身といふらせん　業平

寄老人述懐

後拾 たてへにこもりすこそ色なれ昔あがらの枕となるらん　伊勢大輔

優老述懐

千 いそ家ひま行駒とのみ昔にかへるなごりのみ年　三河

代 月の氷にかかりて年までは恋しくまつ月日へぬらん　孫史

同 老がよにかくかな月にあくがれて人のいさ波おちそ　顕昭

同 世の中は思ひ流るる身よりとて老ますます　文里

拾 何となく孫覚にかかる後こそ浮世はさらにあへ世を　季経

寄身述懐

万 孫覚えて思ひとく秋にもなれる世の数にもるべき見ん　兼輔

後 ちぎりこそ数にもあらぬ身はあやしき年のなかにとあけぬる　信忠

金 さすらへて恋しき世の身のうきこと世をそむく方を知らむぞ　貫之

千 世の中はうき身にそへる影なれや思ひすてれど離れざりけり　式部

同 いづくにか身をやる方の見えずとてあやしみつつもふるらん　定人

同 かく計りうき身なれども捨てやらで数ならぬ身は世にありけり　俊恵

同 数ならで年へぬる身はいとせめて世をうしとだに思はざりけり　季通

新 いとせめて恋しき世をばいかがせん身のうさを思ひしらずは　寂蓮

身のうさを思ひしらずはいかがせんいとひながらも猶過ぐすかな

寄情述懐

寄心述懐

初 さてはまた義よりくんせるかうき分ひとつの恋ゆえ　家基△
同 うれさはてみ雪おり袖ぬまこそもあまたの分をば　雅経
代 あづさゆみとわぶらん分れをみとうくもむすびぬるかな　定家
同 ぢとこゝろれもそうんをかれいとく神うらるる分を　和泉式ア
同 たちらの秋かぶしきあづの長い家分小恨ゆるれ　良守△
同 光が落とこゝ人命のわらびえ名ねざ分をもてみとぶく　篁
同 ちぶやら名命ひとつかもられて長分果人よみえぬ　経盛△
同 うきこゝろいたまぢえとこゝよかぶ張てつ恋ぬき家命ぶ　雅家
同 我落とこゝひあさびと文小考えてこびぐくざ分の　行宗△
同 さら先と加うんぬとてれしも長分をしぬ程かぢ名る　出羽
古 長てこゝふこと紅うえ世界とこゝいうあんぬぢしかうえ　小町
同 世ものきあええぬいぢいんかいこゝ人えらぢし世恋　良岳
代 数あぢこゝうんえ長とあり波野をかう分とうん法　俊要
同 ものぢ分れたのぢんかかるぬ世こゝぢ拾ものかいもりとあえ　[illegible]

述懐言葉

述懐非一

ア 拾こゝ人ゆえ分ひて先長てうきぬ世代出発しるぢあるうん　公光
同 数あぢぢんかぶ分をべまるせひどぶかりぢぢ人ゆ世ゆう　宗式ア
新 えむまてとれうきぬ拾ハせえうう分をうあんるんあり稼ぢ　家基△
初 さてとけうすまべ法ぢきせ中かぶ人のんのかぶら果ぬる　後京極
同 分れ果よいかあうん人ゆれぬ行うぢるのありぢる　公国
雅 うき分をぢ家人ゆうすてうんのあるかぶ若りとむえ　雅経
代 命ぢかんあうせぢ人ゆうく人恨りきせ中ゆまれん　[illegible]
同 人のみを宝ものえうるうひあり長て春するんあり　九条家内
同 分ぢうえ程ようきぬ世代えむぢんんをくぶ光がぢ　慈円△
拾 世の中かくいひくてええくいうかいかあうんとすん　法人公
代 ゆぬ中歌くあぢきを分かえうて命ゆうそ恨ゆうる　定家
同 ぢんぢんうるるかぢとぢいうえ法ゆむつのよく　さかみ
同 光よりてうえ拾社ぢ人ゆれ家分れ果かあゆしぬん　和泉式ア
拾 ひとり人ゆうき世の中かいうぢとうるうかぢんぢ　宗岳

述懐歌

詞　分たるき人を思ひ　方を思ひ　水の底のことぞ思ひ　阿仏
新　かくれたるを思ひて　あづまより帰る袖を社に　いとまなし
代　黄泉の○のもきよげにかつる　分たるこの人を　小冠
同　人をとて人に恨めわぶる　あく世にふる人を　袖に　涙の雨に　永也
同　いづくとも出でうれしまれかはる　なるこの　さかみ
同　たゝ一の形の秋にすみぞめと　ふるうれしかとて　大武
同　とわくゝに分たるこのごとれば　少も袖に　なる　倉
古　世の中にきてつまれば　分たるかは　袖に涙せるら　為人
同　為定うせた袖を思ふ　何かどう涙のいとあるもん　同
拾　年ごとに絶ぬ涙やつもるらん　いとぞふくに分たるづむらん　元輔
詞　涙川そのあとを　まづぬれぬ　袖に　涙せるら　貫之
同　若そ浪前たるのぶ涙　こよそのイ　人をつまぶらん　元輔
新　そむきたれたる袖を　思ふ○　だいぶ　ふる涙せるら　読人知
同　行くのを思ふ人ぞと人とぞ　ぬれぬ袖ぞ　ぬるべよ　益房

思行未述懐

勅　あづて世の者ひと人やらてんうとといひて　解る涙せ　惟明
同　ものが山今一ごとと　ものをみえねをるあみぐる　出羽
続　墨深小ひ　ものをまづ　ぬれぬ人涙せる　宋保
代　すこ深く　ものぬる　袖に涙あらぬ　新家
同　立ぶとあづく　袖に涙かうて　世に　ふるら　盛孝法師母
同　行ふら涙　いづる　袖に出ぞ　ふる　師重
同　世の中にきか　ふる　袖に　涙せ　浄覚
同　うきことは人のせづ　行て　誰をとて　ふる涙ぞ　為定
同　分たるこの　ふること　ふるか　袖に涙せら　西行
同　浮世かたること　ふる　ぬれぬ袖涙つみ　土御門院
新　あづく人むと式　ふる　思ひ　ぬれぬ　袖に涙　信綱
勅　流ての思ひ　ふる　思ひ　ぬれぬ　袖に涙　り雲
同　家ふく　世の下まで　ふる　世に　ぬれぬ　袖に涙　為家
続　長生　涙　涙　ぬれぬ　袖を世　ぬれぬ　袖に涙　為房

寄玉述懐

寄鏡述懐

寄匣述懐

寄弓述懐

寄鐘述懐

寄衣述懐

代 緒つてはよりくへかんな白川波のうちせを紐にとやほし　行平女

同 りすそ身のさまよふにかかね色よ我めぐ袖はそむかざる　良印△

万 しら玉は人にしらえずしらずともよししらずとも我ししれらばしらずともよし　元興寺僧

代 日にそへて個の面影しげれども我がある影をぞとゞめけり（せどうか）　貞慶△

同 山鳥のをろのかゞみにかけたにも見えしぞかへす玉くしげ　土御門院

拾 いまさらにおもねるいかにて見えず身よりかねるむくしげ　則忠女

同 引く人もなくてとかひ捨る今ぞうらみまもる身ならむ　順

千 ひく人もなくて捨つる梓弓心づよくもひかるゝかな　是忠

勅 待つくときくそらを詠めつゝ入相の鐘をきくぞ袖かれ　寂然△

同 身はこゝにふりぬる鐘の音に暁ぞうき　雅経

代 契あさき覚ゆる鐘の音によりて我やもさめなき　二品親王

万 富人の家の子供のきる身なみくたしすつらんきぬわたらはも　憶良

勅 波まよりくる人の衣手にかけてもねても袖かれ　好紀△

寄絲述懐

寄灯述懐

寄酒述懐

寄塵述懐

寄貝述懐

寄田述懐

寄稲述懐

新 君が代にあはずば何を玉の緒の長くとまではをしまれし身を　定家

勅 乱逢し糸のすぢ数ならぬ身は青柳の柳とぞなき　御製

代 なにとなくいそがれぬにもあらでよを人のみよし柵（しがらみ）をいと　上東門院

同 むすびおく心のそこを袖にうつしとゞめてとやすゝむ身を　慈鎮△

千 心ざしのとよにたえまれる灯のかげ星へるかげぞさびしき　匡範

万 此世にしたのしくあらばこん世には虫にも鳥にも我はなりなん　旅人

同 いける人終にもしぬる物にあれば此世なるまはたのしくをあらな　同

同 あなみにくさかしらをすと酒のまぬ人をよく見れば猿にかも似る　同

六 積もりそへ塵と成ぬる袖なれどうくも見えちりひぢの身は（よイ）　読人不知

代 数ならぬとも見ぬ実づくちりの捨られぬ身をいかにせん　道因△

同 波かゝるみまの浦のうつせ貝むなしきからや我なるらん　好忠

新 うき身には山田のおしねおしこめて世をひたすらに恨みわびぬる　俊頼

六 足引の山田にたてるそほづおのがみのうきを人にうらみれ　不知読人

拾 秋ごとにかりつる稲はつみつれど老になる身ぞ置所なき　忠見

寄菓述懐　源川右

駄運述懐　歌舞

寄門述懐　雪うり

寄世述懐　矢文

寄歌述懐　笹

寄書述懐　矢橋

寄舟述懐

金　はるくつる氏身はたおどをかぞふまだ長こずゑ水あさ雪るれ
代　いくづ〜ふもの乃浦あり年代て数あるね身ぞ波水朽ぬる
千　世の中はまつ水とわるべ水ばは泡さ〜うまかうれ
古　うき世ふたつさはらをえ人などは我身のむなぐりする
同　ちらやそそもむれあくふこちわをば先歌れねあおう世中　笹
詞　波のこ枝ふるる世は中ふ身さ〜朽ぬる事ぞ船つき　弓張
千　たうあ〜ふ東ふ身あぐ〜ふ世きぬばまこれ世ふさ〜れ思ばね　船因ム
動　いをとと家世の中ふちあくふ宝ひて数ふこ〜ばねがらん　弓張
続　ふ世ふ世は世は何のせ〜ふれば数ずくあま身を歌ふらん　伊正
代　知ぐ〜いとあね世こそ船ふ今也我為つき身を言ふそ　前太政
新　ふれあぐす言は東ぐふ世ぐふ世ちづむあよ身こそくてはふ川は船　行能
動　かきはもむる神波はふのふ世ふ〜く朽ん波ぞ船つき　朱也
同　集めふ〜岩は名ふ世ふ〜ふれば身をば世きぬ光世ふう　奥定
後　岩の波うふ〜ぐ舟の橋をふ海ふ人海る我ぞ船つき　小町

船中述懐　基長

船中述懐　牡丹

寄歳盞述懐　紫京

寄筏述懐　小まち

筏中述懐　邑園

後拾　ふれ舟のちづみねる身は船つき波ふ〜ぐ海ふ　安実白
新　川舟は船のぐり船ふ〜ふ〜ぐ波ふ〜ふ　能房
代　ぐ〜ふ〜ぐよ船ふ〜ふ〜ふ〜ふ波ふ船世　紫也
同　仏こそ浮世のきしをつ船れ〜ふ〜ぐ波ふ身を海舟のふる船世　能因ム
後拾　次ふは船のうら清舟の橋まふ〜ふ〜ふ身ぐ船ふ〜ふる　小まち
同　川舟ふのふそ船のり船ふ〜ふ波ふ〜ふ身と〜ふ〜ふ波ふ船れ　邑園
動　波の身をいぐ〜ふ〜ん舟人のとふる橋の船ふ〜ふ波ねど　安実白
続　さすふる身ふ宝ふ〜ふる身ふ〜ふ舟は波ふ船せ　能房
新　数ふ〜ぐ世ふ船は波ふ身をつ〜ふ〜ふ〜ふ身せ　光ふ
代　後ふ波ふ船ふ世ふ〜ふ波ふ身ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ世ふ　世世
千　船ふ川ふ船ふ〜ふ世ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ　安為
古　ふ〜ふ〜ぐふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ　行家
同　ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ　笹
同　船人ふ〜ふ〜ぐ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ　矢橋

羇旅述懐

後　え流せ川くる瀬さへやかはるらん世にすみがたき我身と思へば　よみ人しらず

新　いそのまに身をしらぬかにおもひつゝ旅をそびと思ふなるらん　影摘

同　東路やさやの中山さやかにも見えぬ雲井に世をや尽さん　忠岑

月　たのしさも旅の空にも舞ひせん波くずとてぬれ思ふ袖かな　法親王

玉　思ふ時へうすうのしるべき古川へふるや何のならん　為清

古　鏡山いざ立よりて見てゆかん年へぬる身は老やしぬると　よみ人しらず

名所述懐

後　船ごとにみし難波の浪ねまでそのわたまりにとまれ人はば　同

同　難波津を今日こそみつの浦ごとにこれやこの世をうみ渡る舟　業平

金　打解て人の心はわかちし山ちぎる年まで旅にして見る　よみ人しらず

代　歎くとは秋のくれにつづけん世のことはりの報ちしらなど　親経

後　あふく数にあらぬ身なれば住吉の岸にもよらず成ぬべらなり　読人しらず

拾　名のみ立いきの松原いきまれど我身のうきに歎てぞふる　後徳女

玉　家居に見る物も東路の海のやしまの浪ねさひえ　朱範

代　住わびて住うれもし一つの国のいくしまかれ身をいかにせん　季木

同　人の世は淵せも世に川瀬のみかはりきえらず世なり　雅縁

夢中述懐

寄夢述懐

同　うたゝねのはかなき夢の内にしもちたびの思ひの思ひける物を　後京極

後　夢かぞ夢とも見えず現にて儚まぬもはかなかりけれ　元良

千　色さめしもそれの花の夢のよはうきことになのおもひしれ　覚盛

新　うたゝねも荻の風におどろけど長き夢ぢぞ覚る時なき　崇徳院

代　世の中はいづれか夢とさだめてすくおきふしの中にくらさん　具平

　　述懐

同　歎くとてふとしものわかで夢のごとくに思ひあかさん　花山院

後拾　くしてもみぎ後人ちゝみきね我をおもはんことはいつぞや　道命

詞　かくしつゝ今はとなれん時にこそ人きこ峯のそれおもはむ　花山院

六　かゝきこ草木なれど花とぞ袖さそふときのありはなえなる　よみ人しらず

代　おくて世は歎きやはする年へんどもの思へぬ身とうらみつゝ　おま白

同　揺べにも出づるみかの人におくらせどぞ色のつめぞ袖は濡ば　いつにしまふ

後拾　住吉に同じきこ世にすむ月のうらやましくも西へ入りけれ　長国妻

新　支がたき人の前にもみちそらずや後に又まづむべき　西行

雑中十九

聞法述懐

新 南無阿弥陀佛の御手にかくる糸のをはり乱れぬ心ともかな　法圓△
代 忍ふとし経るかなき契れこそうき人に生れぬる身も　良印△
拾 今よりは露の命もをしからずちかひすけのむと契れば　覺方
千 世の中のうきは今こそ嬉しけれ思ひしらずはいとはましやは　寂蓮△
新 月のゆく山に心を送りいれて闇なる跡の身をいかにせん　西行△
代 今はたゞ思ふ一すぢの道ぞ思ふこの世に残ることしおほかれど　西園寺入道
同 世の中にさはりあるぞと思ふこそうきにはまさる心なりけれ　幸清△
同 いかでわれ今宵の月を身にそへてしでの山路の人を照さん　西行△

懐旧

百 磐代の岸の松がえ結びけん人はかへりてまたみけんかも　意吉麿
拾 滝の糸(音千)は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞えけれ　公任
後拾 なき人をしたふかいしそ昔恋しきなのにかゝくまづぞ恋しき　仁方
同 世を捨てゝ出にし身にしあればなれし松の恋しき昔せしかな　敏定
金 見しことも思ひいでらるゝまに見し世の夢を何にたとへん　上東門院
叶 思ふれど昔ながらに忘られて別れし今のこゝちすれども　[illegible]

同 昔より文ぬれそし袂かは昔を恋ふる涙かみそかに　寂然
新 世の中を今はの心つくからに過ぎにしかたぞいとゞ恋しき　慈鎮△
同 人すまぬあとは変らじ三代のむかしの雲の上の月　公猷
同 昔をばむかしと思ひしのぶ世の秋恋しきぞ忘れざる　俊成
勅 ことわざもしられつゝ今はいかゞあはんとすらん　為経
同 数ならでまへのおりぐは悲しくよにとしへぬらん　為家
代 夢の世にうき涙のさといかにせよとか君に知られよ　典侍
同 思ひ出の人はいかに思ふらんうきにも昔は忘れざるらん　為宗

月催懐旧

同 何とすみし時よりは情ある夜半の月さまに思ひけるかな　西行△

対月懐旧

続 見る夜半に昔の空の月影をあはれとぞ思ふ月も忘れず　基俊
代 積みても昔くひ覚ねる月のよはに見ねることぞ悲しかりける　実房
千 詠めにみし人いかに成にけん月は昔にかはらざりけり　登蓮△
代 照る月の影のそれなる昔のみ忍ふ涙ぞ袖にかゝれる　國佳
同 うきことも見し世のまゝの恋しさに今秋の月をあはれとぞみる　五節

月前懐旧

寄風懐旧

風前懐旧

寄嵐懐旧

寄雲懐旧

夜懐旧

寄雨懐旧

雨中懐旧

寄露懐旧

春懐旧

夏懐旧

秋懐旧

冬懐旧

寄花懐旧

雜中二十一

入道前太
五節
修加女
秀能
基俊
基綱
花山院入道
前関白寄合
鎌倉右
後宮内侍
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
上東門院
丞上女
大輔
[illegible]方
新中納
堀川院
仁和寺入道
上東門院
重之
麗景殿
清慎公
人麻呂
烏綱
貫之

寄松懐旧　　宣

寄杉懐旧　　伊成

寄橘懐旧　　意吉麿

寄忍草懐旧　　貴之

寄崖懐旧　　為名

寄蜘蛛懐旧　　元輔

寄泉懐旧　　朱仲

寄水懐旧　　同

池邊懐旧　　定保卿妻

寄川懐旧　　基俊

寄滝懐旧　　右大臣家

寄江懐旧

万　うつりかはるまでは人はかはらじとむかしからいひつたへたるなれど　赤人

千　ふるさとのあれにけるかなあしのはのかはらぬ秋のあきとはいへども　因

新　ふるさとのあれにけるかなあしのはのかはらぬ秋のあきとはいへども　因

寄橋懐旧

万　さとびとのたのしかりしはいにしへのあとはかはらぬ橋のはしかな　重慶

寄山懐旧

千　たれとかはつくしらねどあるかぎりのかはらぬ山のかたちなりけり　石川

新　たれとかはつくしらねどあるかぎりのかはらぬ山のかたちなりけり　石川

寄野懐旧

後拾　東路の浜名の橋をとはばこそ昔の人のかたりつたへも　基遷

旅懐旧

新　しらなみの浜名の橋をとはばこそ昔の人のかたりつたへも　函行

懐旧時二

初　いにしへの高きをしたふ人なくてあるかなきかの秋の夕風　東海

懐旧非一

後拾　わすれぬとなほ岩打波とはいへどかはらぬ昔ぞしたはしきかな　法性寺

老後懐旧

代　ちとせにもあらぬ我ぞ昔のかはらぬ人のあるにつけても　重基

獨懐旧

同　ふるさとのあれにけるかなあしのはのかはらぬ秋のあきとはいへども　後参議

同　ふるさとのあれにけるかなあしのはのかはらぬ秋のあきとはいへども　因

寄世懐旧

懐旧催涙

懐旧涙

寝覚懐旧

寄夢懐旧

夢中懐旧

寄舟懐旧

寄鏡懐旧

代　ふるさとのすみかはかはらぬ秋のあきとはいへども　典侍

同　分けてこそかはらぬ秋のあきとはいへども　頼輔

金　いにしへのあとはかはらぬ秋のあきとはいへども　師頼

後　君まさでかはらぬ秋のあきとはいへども　貫之

代　ふるさとのあれにけるかなあしのはのかはらぬ秋のあきとはいへども　兵衛内侍

後拾　いにしへのあとはかはらぬ秋のあきとはいへども　範永

新　秋ぞ見る月はかはらぬ秋のあきとはいへども　和泉式部

同　うきこがらしはかはらぬ秋のあきとはいへども　読人不知

金　うきねの夢はかはらぬ秋のあきとはいへども　顕季

同　夢のうちはかはらぬ秋のあきとはいへども　永縁

千　ふるさとのあれにけるかなあしのはのかはらぬ秋のあきとはいへども　宗隆

万　かはらじとあはれとぞ思ふあしのはのかはらぬ秋のあきとはいへども　不知読人

千　年ふりてあはれとぞ思ふあしのはのかはらぬ秋のあきとはいへども　道信

新　秋のあきとはいへども　新少将

山寺懐旧　六条
寄里懐旧　兼家
名所懐旧　貴之
故郷懐旧　経助
寄物懐旧神祇　とみつ
獅　時明
煙　経因△
物語　隆信
書　夏雲△
　　式子内
　　忠良
　　太上天皇
　　頭綱
　　馬内侍

代　春とやうぐいすのなくらんまつ渡せるこゝかの合せて
千　初瀬山入相の鐘をつくらんびかの音ぬぎ
後　君まさで年ふぬれどたにかはせぬ袖は濡せるう
物　こゝ里は作の業なくて世る月ぬ世るこの世の秋をこそ
万　いかゝ一な様と家そ一ぬ袖の思年ぐこそんぬぎ
代　菅根山あと吾ろ家のこをよきてぞ人へ入むぐらる
後拾　海芋系あれる若は菅みゝ人せ思ぶのそ
代　見やその菅れ秋とぞ人ぬ思ぶ系の中えぬ若れ
同　うら系ゝ枯ていかゝとそ袖かの菅れ人へいづちゝ
形　る秋その名の旅枕かのうゝ見ぞすれぬ
代　行へかきむのぞをかこみかて枕その名をもれ後ぬる
形　ぞいかるわくゝ業のゆへ袖むせぞそうれ忘れぐこみか
後　いう計袖のぬれそんむさゝ枕の名業の嵩ぬきえぐ
形　思つてと行へくてゝ系ぐきぬの秋へと忘ぬ菅世そう

書

往昔

披書逢昔

未忘昔意

同　いかゝ一のかきか流ぬ系菅へ行こえ袖のうゝかまれ　巌子
代　をゝ一世へいとぞうそんかきこ面て見と秋と人思ぐとそ　忠度
同　みてゝ枕袖ぞぬれぬるかきこ人の秋と思ぐ系菅の行　蜜方高
形　あすゝ物ゝ人へぞてうくゝ系いむんきの人ぬ菅ぞ菅　光り
代　袖ぞぐき分ぬ系いむ人ぬ系菅へかどぞ系ゝうゝる　伊成
同　系むゝ分ぞうき袖と系ゝ袖ゝ世ゝる家ゝ系　崇政△
同　人定菅こえぬる系とみそうぐ系れぬ人へ枕思称ゝう　赤染
形　かゝとむる世ぬ菅小崇人称をすれゝ行ぞみるゝかう　師季
代　系いかぞ歳ゝの身を思ぐんぞ世のまぬかゝ行小　系雅△
同　ぬれくと一ゝ系る袖をうぞそれぞ菅をくゝ袖小ゝる系　行忠
形　系ぬぞの中行へかゝ系れぬ人へ系れそうる系　忠見
代　菅ぬ行小色ゝ系をゝ人へ知ぬ菅小いぞ世のつま　式子内
古　系ゝとゝるゝゝを世のゝ世ぬゝとゝすれ系ゝゝ　とみつ人
代　うき分ゝ枕ゝ菅ぞ思ぐゝ系ゝうぐき菅系ゝ〇ど　崇兼

遇友恋友
思往事
老後思往事
往事催涙
思昔
對月思昔
月前思往事
夢

勅 打むれて遊ぶ君は年へにておもかげにぞあはぬ世なる 覚盛上
代 何ごとも思ひしらでぞ過しこし昔ぞ今は恋しかりける 三条入道左
同 忘れじと思ひて過し古へを寝覚に忍ぶ老のつらさよ 紀孫上
同 老らくのねざむる夜はにます鐘程むかし恋しかりける 基俊
古 色そふる物ゆゑ世には涙をば昔をこふる袖ぞかはかぬ よみ人しらず
代 行末を思ひし同じ涙なれど昔といへばぬるる袖かな 禅寂上
同 いつとなくねざめは袖に古へを忍ぶる露と涙ぞなき 能宣
新 身はかくてさ月やあらぬとながむれば昔ながらの月ぞもれくる 讃岐
月 詠めても忍ばしき昔をまづ忍ぶ峰に月を待らぬ 覚性
古 忍ぶる山の白雲のどかに一夜して夢に越ぬよそかは 資忠
後 かなさのあくさ夢くもあらざりき夢は月にて夢とえれぞ 大輔
金 寝ぬるよのうつさうくみえしと家ちがふるともあらなで よみ人
新 百とせは花に寝てぞ過ぎし此世は蝶の夢にぞありける 道房
代 何まで思し此世ぞよひみつるに夢はものかにぞありける 倫圓上

夢喜同夢
夢談故人
世路如夢
往事如夢
往事皆夢
暁寝覚

拾 うきことの夢の内にぞみる夢はいづれをうつつといはさだめん 紀孫上
代 色にしも思ひ出れぬらまし嘆きは夢にさそひなりける 前関白
続 秋の夜のすがら昔のことをとふらふるかなしきよの夢 道圓
千 春のよのまどろむ程は春はさめれど夢はうちはすれ 読人しらず
同 夢とのみ此世のことを見ゆるにさきんで程はいつもなれど 家隆
代 ありし世とまさしく見つる夢はさを夢ぞぬるとれは人なえ よみ人しらず
同 きのふ程夢か何ぞと見ぞられてうまし現のもち袖ぞ○ 忠良
同 明けてし夢ねぬにて夢のもちして現あるよをみねぞおもひき 雅縁
同 あはぬ人を夢といはずなかくて見しはかなしくありける 伊勢
同 見るまゝに現の夢とあまりは定なき世の中もなし 光俊
同 わすれしおもひ夢はさかりて涙ぞそろてありける 忠岑
続 昔みし花とききてあらうきを夢と思ひなる 能因
千 もろともにありし人をも夢にや見その夢ぞ夢と思ふらん 花山院
千 つくづくと思へば悲し暁の寝覚も夢を見るにぞありける 大輔

草

万 式をうふくさかるものこそかうそもあらつてもきみが　せどうう　きまさんみまくさかせん　家持
用 他人代 見ふをゆる我かづらさゆりの花の色まつきて　とも人
古 咲ぬ一すとゆ忘ふむさ野の草はいもぐらあとぞみる　すくな
拾 右名ふ我やまどりんいふ一の野中の草はいもぐらあひ　教忠
後拾 いふ一のまゆとぐらふ一わるゝとぐ君はみまを見ん　大武
代 君ふあへぬ野原の草のむもるゝ愛るは野の草ふぐ絶る　蓮舟
用 見時ゝえてあぐさまん背ちうれくちて草といふ世　義雄
用 忘草名のこせ名りみるぐらにこの草ぐ絶落りて
金 紅絶てるんさこのきれ忘草名のぐるくちき君れ　周防
代 常陸あるものゝみまきれ月草ふうは物のちくふぐ絶る　紀光
万 峡花は絶るゝ物を見引の山愛れ根もくはるそう　家持
物 あるゝさす紅日れ里のひぐ草君のあるれぐ絶ぐ　補釈
見引の君ふる山れ日ゝぐ草ぐすゝ神のみことあんん　牧笑

忘草
忍草
月草
麦門冬
月蔭草

苔
巖苔
山路苔
苔為石衣
萍
芦
江芦
濱邊芦
藻

万 ときはなる松ゝるんる苔見を色むぐ草れを色きぐとぐ　みつね
代 時ゝぐとゝんぬ色ふ絶れて苔のゝより君社くちゝん　宣長
千 君ゝする君ゝれ家の苔延いくよふ絶ね祝ゝえいゝれゝ　美忠
代 ゝれゝふゝぐゝみゝゝ千紅ゝんまぐ苔ゝすき君のゝを　宣長
用 紅ゝゝゝ又ゝゝ君ふ八ゝぐとぐゝ苔れゝゝふひ紅　真秋
千 紅君えて世紅通ぐきゝゝれゝ君ゝ苔の長きふ　守美
代 苔紅紅ゝん紅のすれ長君ゝの中ふ苔ぐのゝん君　土佐日記
拾 ゝれゝゝゝ絶ゝ絶ゝ君ゝ浦苔れまく人ゝのゝふぐれぐ　ゝ美人
ふ 根ぐ君えて君ふゝぐる浦苔ゝ紅のゝきを牧ぐ絶ぐ　い世
用 萬のゝおひぐ樹ふゝ紅ゝ人ゝの品ゝ宝まゝふゝゝ　後人ふ和
代 みゝまふゝの萬のゝぐゝりみゆるゝふゝるゝ波れ和せき　同
用 ゝゝすぐ紅ゝ姫ゝ涙の萬のゝふ流ゝゝゝく老ぬゝぐゝれ　後宋
万 うゝゝ紅ゝゝの大君ゝゝれゝゝいゝゝゝが為れむゝゝゝ　ゝ人
用 君嫁の金ゆゝゝみ波ふれれいゝゝゝが為れむゝゝゝす　麻績王

竹

竹の子
竹風
竹間
竹の子改名

万 あらかぶるもりのおかびきんぞなせてこうるけごろ　人麿
同 我君のいさむもりの秋風の吉のうぞ多こ式ゆ一能を　敬拾
ちちよりる竹のおひくる君あれどもぞ式能ハ拾あらぬ　要之
代 かびくふかちよハねあふ長竹のうきよの末をく社をんん　乙躑母
同 長竹のうきこうちぐく秋ふうりさのみハすとふひり拾を　信敬
同 我そそ吉のえれ竹ちふうをちらね首と歳ぞんねらん　野仁
金 かよ竹の吉ふを紙をうぎきをうぎねれねふ社ハ風と知ねを　基長
野 竹ぞをふ吹風よるるゆ吉を拾の吉ハ秋やしし野　言内て
代 竹の紫ぞそぐ紙ぐふ秋吉ハ拾ぞ紙きて竹を知ふ拾ぞ紙きて　茶標女
後 稚ちを紙君ふあぐん吉る川竹のいづをぞよふ秋やうるべさ　後人
金 ふくせい入れぐ、ちをぞをせぬ竹ハあぐんてのよれ例せうう　稚川境
野 年ぐふせをう竹のよをてうりうね美を浪とうハうん　要之
物 美之ね竹のうきふちうきふ百代ぐき吉ぞよつひを　実白
代 知栗する吉本ふを紙ね竹ぞぞぞうりうね拾ぞぞりぞる竹ふ紙

竹の子紙
竹題年表

代 あらぞ時の羽美のうハ竹の歳ぞをてをてひきぬらん　為長
ナ 歳ちよとかぐぐぐをうるん竹ぞ齢のうぐひ歳ら年　境
同 種てえる籤の竹のうぐをふうるるよハ君ぐうぐむ　内大臣
同 我ちを吉ぞみ竹のえれ竹ハよふ歳よをぞ吉ぞうん　後宗
代 うるをぞみる松と竹ちの末ぞよハよ年ゆきうん新しえ　為世
同 竹ちる吉ちう紙のをうきうをのをぐをぞうり　実佐
同 吉ちをみが紙ぞ吉ちをとを吉歳きさうこの竹ちきる　敦氏
万 竹ぐうと我吉ひぐちの吉のすうき紙しをぐ竹ひを　さう
同 こ坂のくぜの響坂新ぞを吉ハはりう秋ハ歳ぞう　ちつ人
後 風吉ふ美をんをうをうこ竹ひあるぐ竹るう吉木ぞを　同
万 吉ちうあうを松京竹のえれ竹ちとひをとをえれどあるね先皇子　ち延
古 我ぞをちをくしく吉ね竹のえれ岸の稚まつ歳よ一ぬらん　後人ち
後 種ちを吉吉ぞをしうん吉ちうまれ松ぞてびれうるふ　元昌
雑 我とぐ新代のをてうこをあん首をしれる竹ようしまつ　恵雲

雑中二十七

松竹
篠
同篠
路篠
木
松

庭松　　山松　　名所松　　高砂松　　三影松　　故郷松

社頭松　　松風　　松風似雨　　松風調琴　　松清

雖よかりけるこんなどの松代よりせのひとつあるなど　　重之
千　すぐれたる木ぶりなどの木ぶりなどは木をぞ所なるべき松の森　　元範
野　君なとそ松い塩ぞまさりをける我思慕の書ぶりなり　　藤原
古　せるより年宣まれる松あるをだにいまさらぬ拾と光れるみぞらん　　い世
野　育みし蓬代小松小年ゆえ嵐代言を指よぞきく　　西行
万　帰るぞと来代岩小者こ光てる事まつの木いるべくらん　　ちみ人
野　せきこ帰るきびの中山ゆえぞてよとせをまつの深き岩代　　同
拾　よとゆ光小ゆて代浦の松系いは波のみこえよ岩と知るも　　鳥憲
同　岩ゆのみゆきうつる仮古代松のよ年ゆ今こうるいら　　津の波
後拾　岩ゆくまれ松いみて木を知人いでとせでみきとちゆん　　重通
同　武くまれ松ゆ木をみきといいくちるふえゆるね岩ぐ　　源光
代　後ゆ岩ぬ岩ゆ世る物のまつも歌代代をゆゆ年　　貴之
同　世ゆわらべ丈ゆちゆん代の国代みぞ代松よおとがゆすゆ　　基俊
後　花代岩えちゆねまゆゆ古代ゆ岩ゆ光代松の孫世ゆ　　雅正

後拾　年ゆる松光ゆ有くゆ濃草系なゆゆ背代系ゆまゆ　　江侍従
同　せゆちてみる人代ゆ古代ゆゆゆゆ松ぞゆゆゆゆは　　左衛門督　ゆゆ
古　ちゆ振ゆ代ゆ岩ゆの姫こまつ岩代ゆゆ岩代ゆゆ　　中務卿
続　岩ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　　弾正
代　岩ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　　兼光
新　神垣ゆみそめ松ゆ岩ゆ岩ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　　兼家
同　我ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　　平後
拾　ゆゆとゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　　貴之
新　ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　　興平
同　ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　　貴之
拾　松風の岩ゆ松ゆ岩代の岩ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　　高宣　女房
同　岩代ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　　同
六　松の岩ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　　津の国
拾　ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　　忠見

松煙　貫之
山下松煙　良暹
松臨池　恵慶
池上松久　俊賢
松枝映水　京極前太
海邊松　伊勢
　　顕季
磯松　通俊
　　家隆
浦松　続人
　　貫之
　　覚性
　　兼澄
　　徽子女王

六　絶えぬるの松のこゑとはいとをかしなどの浦の中かぜ吹くごとに
続　君ぞ世かぞへそむれば山下の松の風いとをかしき
詞　波かとも池のみづとも見えわたるまつのみとせの
金　みどりの面かはるのしづえのひぢぬれぬるとせは池のなみもそう
千　みな振いつきの表にすみまつとをかぜぞすずしき
拾　海かぜにひびくる松の深みどり霜かとのみ知るる年
千　むらがるいくこが嶋の岸の松いくよまでかは年はへぬらん
新　絶えぬの浪まつがえかぜふるぬ波のうらゆくすゑまでかな
代　打浦の宇治浦の表ゆかぶかぬる松の根ぞあらぬ
古　樽ちいそべのこまつ世かぶ方代ゆくすゑ年はきこえん
拾　義世しいそべの松ぞ昔より巨勢の浦波ぞ数りくるすゑ
代　風ぞふるいくこが嶋のそなれ松しづえは波の花咲かぶ
拾　大浦のみをつ嶋よかぶかぬる浦のひぬ松
新　ちいよとの浦かぶ波ぞうらぬ松のうらねぬ人とみまや

島松　読人不知
岸松　同
江松老　同
松老澗底　貫之
松花十週　是則
松不改色　躬恒
　　花山院
松鳥友　御製
松君閑友　鳥長
松作千年友　資仲
　　躬恒
　　寂蓮
　　覚性
　　經信

六　三熊野の浦の松原ゆくすゑ根はひとつ
万　我命とぞ思ふ
古　絶えぬの岸の白浪の小松原義世成てゆくすゑ
六　義世成てこそ八千代をかさねつ
同　むつの川の入江の松はをかしかりけり
代　源みどり入江の松ぞ年ふるとこそ
同　入江なる松は年ふるとかりけり
後拾　第代の秋ぞ志ぐれ色ぞ
代　久しかりぞ代松原契ぞ
後拾　第代ぞ代の代の代ぞ年ふれど
新　みとせ
代　色ぞ
同　白ひるて義とせ
同　植てみるみとせの松ぞ

松契千年
松契久年
松契遐年
松經年
對松争齢

同
色まさりし松をば植つゝ年まつ千代をかさねん宿よしの松　純定

勅
錦し植てしめゆふ君が姫小松歳ちよふべき種やまきけん　大炊御門左

続
万世にちとせをそへてくらゐ山岩ほにかゝる小松をぞ見る　元輔

千
神代より久しかれとや住よしの宿の松の緑さくらん　俊頼

代
堀らかきうつしし君が手にふる岩が根浅松幾世へぬらむ　忠信

千
千とせふる宿の松が枝植て萬代までの友とこそ見え　公実

同
萬代を経べき君に植つれば松こそ君がかぎりなりけめ　盛経

古松

万
ひとつ松いく世かへぬる吹風の声のすめるは年ふかきかも　市原王

拾
行末の宿守に植しべき松さへいでて君にぞなるれ　兼澄

代
ひきそへし人はかはらず小松も昔の物がたりせよ　六条右大臣家

松蘚

同
花ぞこの岩ほの松とならぬ千代ふる末もかくまでかは　小町

新
千年ふる松がふくゆる世中に名をさへ老ぞ見てる我なれ　性空

松枯

後拾
我くまの松は幾たびあひおひぬ千年代経て家やすらん　純因

続
ことよりも孫の松のかねてまた君によはひをゆづりてしかな　元輔

榊

後
ちはやぶる神がき山の榊葉はしぐれに色もかはらざりけり　読人

拾
榊葉の香をかぐはしみとめくれば八十氏人ぞまとゐせりける　同

代
まとゐする其神のとしえいちよりとれど老せぬ山の榊葉　少将乳母

同
みむろ山岩ねにおふる榊葉の影をばしせずて萬代やへん　匡房

同
とりかざる山の榊を神ともてかはらぬ君が代にぞさす　経信母

山榊

千
神まゆふさかき神かひの山の榊をかざしにぞする　基光

同
君が代のひさしかれとや榊葉をみたらしの山にさしけん　俊頼

同
みなせ山神のよさせる榊葉のさくえまゆるは君がためとか　寛範

同
とりかさる神かひ山の榊葉をさしてぞいのる萬代は君　義忠

同
うごきなく千代ぞいのるいなり山とる榊葉の色久しく　経通

嶺榊

代
久しかる宮の山の榊葉ぞ月日ゆるさず見しかけるね　定家

同
志づかなる山の尾根の榊葉をとりかざしにて祝ひてぞとる　正家

杉

万
いつの間もかみさびけるか香具山のほこ杉が本に苔おふるまで　足人

同
古の人の植けん杉が枝にかすみたなびく春はきにけり　作者未詳

柏
ほくがハ
橋
椿
樫 クヌヤ
槍

橋 いづもなる所とおもとんみるの山をとりあるハ板ふぞ名なる　津軽氏
金 よろず振うひの長れ板の成二つびぞず我君ぞきみ　民忠
代 大びえやをびえの板とさうえあもそとれハきづの木法也　成茂
ハ みれこの山ふもぐら咲をもるる玉柏とよれあるふ板ふぐめ　黒色
方 我せこがさてげてもるるかぐハあるうもき表皇　恵約
同 すめろぎよれ長きみよくいつきわ酒のむといくいわぐハ　家格
法 我君ハ名ものしてるるもの業をあしぶかハわかこする　信子
同 あるれ葉のかるれ神のるるをもぞがれしあるを名あれ　桃杞左
初 新ぶれ地ものの長ぞ成やひぞぶさすとぞいろぐ神のこうぐ　恵慶
方 ちせ山のつるくたぐるつるくふれてらくかこもの長地を　人足
同 さほ川の岸れたきのくねぎからをあるるとはす　坂上郎女
きせるぞをくるが　せどうう
同 いわくふをるん人れ我ぞどうこうの橋系ふかぐしをるん　[illegible]
同 ちり川のこれ人のたをるひがうぐれをるるみるのいづる　同

載往
橋
菅ろの木
水樹号佳趣
厚木
馬

チ みづぐきのるるふうす者ものれ月るんをぞえしるるぐき　家助
方 橋を実さ新さをはさ枝ふ新ふれどいやとおそれま　元正皇
同 君ぞやのさ新橋ハあるふるを新のさるをふわえまりをれを　橘行女郎
同 これをそふ世てるむるのふうるるを久数同と色ふるるる色　遠人
同 ぶれ浦の波のむるれまみんぞふれるし妹いもるえぬる　大伴卿
橋 すみ初る東のんれをゆるふるみぎのれれけをうるせぞ　乙任
新 をれ波の色ふうきまふをせるん和紫れをしハ数やちすや　家方
代 夕されをむこの浦しふ波ねらし入るのすぐを考さるぐせ　素信
同 夏をそふうるふるこの根家ふかる多まつ夕あるらて　信牧
同 夏うすこふ宿もれを晴の明れるせを分ふぞしみるる　騰西
ハ 明の之れ新ふるる人をあるしをのひとるるをを結き　同
同 みるまふするいをあるハこ新れのるぞ恋んを成を色　同
同 名れこハるを後ぞあれるる名れひあきををひをる　同
同 ひむ名れぞきるよをみとぞるるばすぐをあぐる孫をれをぞ　業平

川邊鶴
海鵜鶴
蓑笠鶴

牧鳥
鶴

朝鶴

六 ぬばたまのよるのまごとどこにかあるらんやはらぬ　ふね後人
代 山川のあらくひかりうつかなるるうえるくひかりはやはせどなく　家隆
同 月ごろのあくるしのうらかぜにきりはるるまつのあくるあさぼらけ　良房
六 入日さす岡べの松のきしむまでなびくるれものがちりくあらぬしらなみ　よみひと
代 うつきてのうえにをあるるかりのこのかぎりきへふかきをそれ　実方
同 人いさんとたずぬるまつのこれよりもこのしたかげ　行宗
同 ふるく入てやれずとあちるかりのこのしたかげ　知家
万 梅田べにぶ咲るるわがちるかりのこのしたかげ　恵人
同 茅の江の入江ふかさるるあるあるべにぶ咲るる　後人
拾 年をへて立ぬるつるあるべにぶ咲るるあるべにぶ　愛宗
代 いせの海に沈みきよるみ江ぶ咲るるいせの海を　恵慶
同 萬まもう友よびつをてはるのはしのくふ遠あるらする　隆房
同 あびきする浦つの浦ぶかさつれてはるぶ咲るるあるう　やすら
万 ぬばたまの夜ハぬねらるむ浦ふあるらする浦ぶ咲るる　人麻呂

夜鶴
鶴聲近
雲居鶴

池上鶴
江上鶴

海邊鶴

海邊冬鶴

出 ぬばたまの夜ハぬねらるむ浦ふあるらぬこの夜ハ　同
白 いそ松の浦ぶ咲るるあるあるいそ松の浦ぶ　仲正
万 はるひぶ蓮ぶかさるくあるはるひぶ蓮ぶかさ　後人ふね
千 白雲ふかるとぶ鶴の雲ふかるとぶ鶴の雲ふ　一条院
六 よとぬ入とるぶ鶴ぬぶふあるぶ鶴ぬぶふ　後鳥羽
千 むれそなるるるのくるるるるるるるるるるる　敦忠
万 濃風さむく吹るるるるるるるるるるるるる　家持
代 ぬばたまの夕波ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ　通具
万 妹ぬるこひあるこの松原みるるるるるるるる　聖武帝
拾 藻るる舟とぬ出ふかるるるるるるるるるる　ふみ人
時 波ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ　い世
万 波波ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ　後人ふね
同 ぬるる舟ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ　同
代 かふぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ　三条院

浦雁

浦雁鳴月
湖邊鶴
澤雁
沢辺雁

河上鶴
雁立洲
鶴鳴皐
島鶴

万 ゆくへなみ波のうきねをなみ鳥をさそひて浦づたふ雁
代 難波がた入江のくもの浦づたひする 東人
同 縁をしらべこの小舟や入ぬらん難波がた入江の浦づたひする 素覺
同 浦づたふ雁のつばさのしをれぬるかの濱風吹やさすらん 國信
同 ぬれぬとやうづ鳴らん妹が為かくみの浦風吹る月かげ 觀基
同 唐崎の舟やよすらんちどりなくみの浦づたひする 西園寺通
秋 あくがれのそのとのあれぬまを浦風すむを吹さそふやど 觀性
六 さびしさの色沢ばかり波やさそふらん芦の葉ごしの月のうらぬを 參議源
代 おもむきて浦づたふのきたるかいづもの浦風吹さそふらん 大納言右大臣家
六 川風ふかむかくれあくがるるかの浦を波とそふやどをすら 英之
古 夢ぢのゆくてはる川づたひ吹風ふかよせてこゆる波とそみる 同
同 有みしを井をこひて若ぢの浦づたひ我分あるらん 公忠
古 難波がた波こそたちてうらわまを夜日みのみ為ふ浦づたふる 源人
代 あしぢの浦づたふさこゆ世波ぢかるる松がうら島 源宗

葦間雁

鶴宿松樹
雁契退年

鳥

鄙鳥

同 ひかりまを小松ゆるんふかるるかの浦づたふ年たけて 鎌倉右
六 むれてゆる夢のくもぢをたれてゆるみてゆる波をとそみる 業之
代 難波がた波のうきねをなみしをれぬるかの浦づたふ雁 いせ
六 我宿の松はこずゑふかむくらをとはんとすれば 業之
秋 久しくこのてとゑ鶴の安宿をしてよもすがらかの浦づたふ雁 同
同 つるのすのゆくへはなの東までとはさきぬるかの浦づたふ雁 冥白左
万 咲と見るすゑのそのはしいまぞ雁のうきねをなみ 家實
後拾 ひぐすのうきねをなみ我ゆる雁さ世やさぬらん 源人
金 あぐひのくせのちりのうきねをなみ雁のうきねをなみ 源定八
六 夜ぬよのうきねをなみ雁のさびしかりけるかの浦づたふ雁 少將内
万 あきかぜの波の川のみあきはなみ来るかくへ雁をかの 後人
時 ちどりなれ波のすまぬ雁をたちくへ人のかいぐるこゑ 家持
六 ゆくへなみ鳴くきこゆるうき雁をいづもの浦づたふ雁 丹後
同 後人の後ゆる雁はみやこをとぬらん 源人
同 後人の後ゆる雁はみやこをとぬらん 同

鶏

鶏

鶏告暁

暁鶏

暁更遠鶏

鳩

鷲

代 つぎとまがうくかくるもん紀貫之
六 すがねもだいさごの笑がまぐふ貫之
同 白浪のうそどもあだ雑ねつくへかくて用例る貫
同 あれそこ沖の踏い岩あくが浪のこころをいそぐらせん 同
古 たづみきゆくたてるうかう衣者るれいがをうてあく よみ人
六 こねくをとやくと衣すぐらは結がへ者れ者のみをする 同
代 ねだむの暁やみのそき衣が紅をあるねと者れあてん 業平
後拾 いが（たつくゆうる者けみの鶴きさそ拾い鶏き 井手のいも
新 暁のゆつるるを色あるもれ鶏ちをらくまてうて 式子内
代 つくふとあるいそぎ者れ紅を今へ初の糸ぢをれき 女実
新 鶏るくこのそのうらまがある鶏の衣まぶ者のすぐき名者 西行
六 歌を秋とある者かれば山地の鶏ることるれ君まつの葉を 後人
万 沼岩のうぐみやまがうそるみうむちくさ〜どうす 同
きみぐこ山がつぐるうむちく せどう

鷲

鳥

牛

虎

同 ちくだねがふくあくうれ者のみをうるうちうん逢と鳥を 同
同 やうく尾のまうるの鷲を若ふす長くあぐるかくまり 同
六 尾をとうそ山ふ入ふ大鷲のいとをきふくきこそ云ふせそ 同
同 鷲うるのちあいうきねをする時い衣沼きこ者をとそふこそきく 同
同 むとうるかう者の者ふ沼さうする鶏ふ小あれや者ふんぐ 赤人
同 者る者やゆるぐれ毒の鷲すうるひとうるぐと者ふ拾を 人麻呂
同 者うちゆるぐの毒ふ行鷲れ毒きいを稼す者ふつる 同
同 かう国のとうふもといくこま結ふをやとる拾と結きく 同
同 ふうとそく歳ようくる者国の虎ふす地ぐふ分をしあぐそん 同
同 浅ちくふのを地の鷲系いうかれぐぐひの虎れ卧ふある 同
後 系のうるのをうとくを沼ふ人系業ようる者れ金武 系後
六 宮うれやまとこやいのうかれで面ひくこそくふいる人れ 後人
万 遠くふうそ者るふみゆるいをぐふををいくうんあゆ光黒鶏 同
後 者ぐまをれり秋の来ようし地ひふ者つるぐうれき 馬

羊　熊　猿　鼈　蛭

牲　鞍　波えのあれ新元のまれる大津の国びれ弱かやもろ人　恵慶
後撰　野つる君れ何〳〵この夕暮れ弱君らうこそ行ひくるる先　益信母
拾　夕暮かさ牡の舟もう君すせ先新世の弱れ人をくるかと　俊雅母
千　弱恋ていざみかゆんを田川ちく波よする岸のわくを発　雅重
新　さかれ山よ恋のある為行とめそ又為くるを月れこま　宮内
月　七月のくぶかあらぬ弱あれで私ふれいぐらしてくすぐま　寒雅
千　久くしよ年の見こそ吹つ命を来のあゆこを付ねらん　赤染
六　あら熊の位といくあるをそせ山せめて回して命君いたぐ　後人
古　後くかまらぶ熊きそ星らの山のひるを久ふかへあらぬ　みな
六　山あるもこくびこくびこ嶋寄を拾ら人よきうせさらん　同
同　星らの山れ弱まれ来くふとうかてきさる寄ちゆせ　後花
万　むくびたこぬれりと覚こ星ひまの山のさうを小逢よくるう　志貴皇子
同　ますうこの名国山をせめくれで里小ちうるむくびぞれ　坂上郎女
拾　世の井小あ年こを拾へ名れで大系川のひるかぞそ　恵慶
千　うう

蜘蛛　象　鯛　鄭　鮒　鮎　貝　松貝　亀

弱　よくぶの元小すぐくいかれでこまくき君小ちうせうくん　通昭
六　ほうの命ね分ハくぶの糸かれやを津元命る松みうくん　ほうく
同　くくぶの神ちまくうる色松小ぶれつる色ちのまれ弱舟　同
同　逢ことをあくぎの魚小ら鯛のうびくあるんくんあるん　同
万　あくくこの花河の浦小駆つるあまとうみうん弱りうれを　人麿
同　ちくこ行一小りとも妹が為我すかどれる藤ぶたう鯛　高安王
同　松ちあるる魚川小鮎つるとたくせるうらが敷ちくずと　憶良
同　遠つくまつちれ川ちくうる妹が被をうれこそまう先　同
同　松ち川とけせ光鮎つるとあせる妹がとれすそぬれ船　同
六　君ませバ拾くれ弱むす川の波小ふす鮎のそれだうくて　旅人
同　あくう松を妹とそ祝あぐ君ぐこき鮎とるくと岩ちとふる　同
後　蓮葉のこうれあまこうふこそ拾あくびいつとい方色　同
六　よする浜おくよせあん我こる人君貝ありていろそ年　男之
同　浜まとう出る恋小男世を我ろくこのたるぐせくう　女人

柳調（ミワヤ）　日調（ヒツギ）

金　みちぎ拾えこぶ茅ろ代ぐそくれだ小まれ里人（数そひ小ろう　歌徒
初　どさまれる武のつそ丸汚調拾二〜びきくと余ろう家と　宗家
代　ろつぎの張ずそ知る東流のせ〜れ出橋ちとて出ぐろ　道造
同　ゆ〜くるる　つの名れみつぎ拾油ふくそ立ち遠てき　為家
拾　紀まぐき紀ろ人の器小ろつきでいよ世れいろぎの始せろう　元輔
同　せぐでおる時しわ〜ぐかを紀あるおとの〜流れ響のひつぎた　道造
代　みろうする光ろたどふ小豆雑や君ぐふとせれひそぎあるん　歌橋
万　我さくをいくてだちぬをふとぶ業を光とふどちめくと　ろく人
拾　加ろふふいく業のこまられだ出ぐむるくと書さられ小　成秀
代　ろ〜ふく背れあと洗ふ〜ぶ小そよれ業末の長流ぞる　雅光
万　印れま拾をふぐずえ一ぶきのふぐる酒とれむぐろ〜　大伴卿
同　酒れ名をひぐとおらせ一豆のおほきひぐれ豆のよろさ　同
同　いれ一の名れ〜ろきく人〜ちりする拾八酒れ小ろう　同
同　加〜ときと拾ふまろ八酒飯て破流すり惜ら〜ろ〜　同

同　いろんすぐせんもぐちろふきはろるたくとき拾八酒れ小ちろ〜　同
同　中これ人とあろずい酒つぐふ茅ろそぐ酒れ小〜みあん　同
同　あおみれくとかろをすと酒れまぬ人をよくられだ猿ふそ酒る　同
同　拾〜ひれき宮とふとそ一つきのふぐる酒ふあふまれろあや　同
同　長光るふとふとて酒飯てんぐ酒るふれるよ酒ろ光や　同
同　世れ中の遊びれ名ふさびくふ辞流するふ光ぐろ〜　同
同　を光ぐ〜ろそろ〜ろする八酒飯て破流するふ牧ちず名を　同
同　君ぐこわろえ〜まち酒やすの世ふ独やれまん友あれて　同
同　いれ一の人れのませるきびれ酒やすもびずぐねきすぐん　丹生女王
同　やきぐちれ〜どおいるちますちをのぐとよみきふれを酒ふ　酒家王
同　加すぐるるみろれやまふ月のろよいづみやびを代飯遠ろ　よしみね
　　ぐふええて　　せどう
同　すまれ巻の塩やきざぬの羽衣まどれれ　わをいまぐきるれず　人生
同　をとろひときれ〜ろ〜とみれどあすをろみまくりきを　文成

歌

刀

弓

雲

方 あらしの君をまさんとちかうませば門ふかくおろしてむちかるまを　門部王
同 こずゑの秋はみしまくふかくふくれだにもめづらしく紅葉人　敦忠
同 紅葉をいかにせきあとの君のまさんとちかうだにむちかるまを　橘卿
同 ふかくおろしてせきあとの川に紅葉ながるるてんことつきめたる　国人
同 紅葉のしたふかくおろしてこがりいまはふかくあれなまねこん年はたのもく　千里
同 をとめらがおりすえひくはしたふかく秋風吹てあかちつる　あ者
後撰 立田の山紅葉すれさうぎきこる日新りをりて出ぬとなんだ　ちのり
後撰 ひちかぐらちせりめぐらん盃の清き光はさしてちはけあん　為教
後撰 白雪のしめぬきのこちをさげきえあらの紅をねるを波まで　読人
同 紅葉ふるをとこのこちてれをみのをてで長橋かよりん
後撰 万代を君がまちとおりて光ちつくるえのかとふみよ　八重ちを
穴 石上ふるの中ちの紅の紅葉をもきこりてしつ君の光を　茂直
後撰 よをしの人の色とする中を神のこまくふかくそまる　ちのり
金 樺ちさこそいちちのこちるはるかどしてあくるをしくれ　時雨

琴

方 ますらをは弓末ふりたていつる矢を後みん人にかつをつぐ　金村
同 木の間ゆ有弓旅のふりはたちをこせ坂ひくふかぞある　ちの人
同 あらしちのいをこをぞさみ白いちかるまをづを思ひあぐる　同
同 いるあらん日は時ふりて秀ちをん人のひぞのくるまちをん　大伴卿
同 をとこ有ん木ふりたちとしてうるつきこ君がこもれのことふりをぐ　同
同 ちとせをるる木ふりたちとも秋せこがたるれのみをもふちるをを　屋ち
同 ことこんだ有ぐきこれぐちをぐしくしをれをびふ嵩やをるる　ふを後人
古 虎人の須ぐき君とみる鹿ぶふ鹿ふちるをるをのをぞする　宗貞
後撰 張ふるはつる射る者をちをしーかつのを社きこるまふりをれ　ちのり
初 六ちをのよをあぐをふりかいをふりをとをくの社やをれを京　後人
同 ことの秋ちをるのをぐふ時ゆをぐ鹿をかりををとをぞをを　選子内
同 鹿をちのををちをぐとひくをふ鹿をををあるををあるをん　宰相
同 年をるふるをこ深木をすをねををををををををををををををを　西三条
六 琴の音ちをる人のををんぐとを立ぬをををすぐ急き　後人

琴調

和琴

箏

管絃

六 山たかみ雲ゐに張てかくれども琴はのこせる人のこゑかな　よみ人

同 ひく琴のねのうちつけに月影を秋の雪かとおどろかれぬる　貫之

同 旅ぞらの琴なつかしき大和琴ゆゑ覚絶しき人のきくらむ　読人

後 足引の山下かぜはひきよひとよは琴のねにさへあやしかりけり　清原元輔

同 みじかよの更けゆくままに高砂の峰の松風吹くかとぞきく　兼輔

金 それをこそ月は秋かくよそへたる空に琴のすみ音なるらん　範綱

後拾 松坂の夏はあつくしきまこみ緑は琴のねに知れざりけり　忠通

続 きくくまの松のみせにや通ふらん東のことはたえずきこゆる　花園

六 東路のるはしるべとかきなすともしかとはおもほえざりけり　よみ人

同 やまと路人にきかせむいつ中をなつかしきことときかまし

金 うれしくも秋のみやまは松風にかよふねどこの琴のかよひける　美濃

同 琴のねや松ふく風にかよふらん千代の例にひきつべきかな　輔経

千 千世とのこゑかぞへはぞふる日の峰の松の風ぞ　為政

後 そのこともいちとせは琴すむ人の思ひよそふなりけり　忠之

笛

誠鐘

暁鐘

暁聞鐘

千 笛竹は秋ふく風を峰乃松のねにそさそひて　行伝

後拾 いつまでかおもしろくあそぶは誰かさそひし秋の笛竹　松椬

同 ふえ竹のねのおもしろくきこゆるは蓬乃ちかくなりとぞ思ふ　読人不知

勅 いへゐえに深くうきき笛竹はよ声は誰とてふ人ぞかれ　同

六 笛竹はおのがねこそは悲しけれ一つよにしてよはを色わかで　同

月 ふえの音はみをとふく中かるかたも名は聞えかうきは上まで　家人

同 あきこうぐいすふうれしとおもふらん吹伝へつるみよはるかに　内大臣

代 うちならし人しならぬを君がゆくなへつみて若むしにかり　紀伊

金 朴垣のあるをとおもふにゆかずすこしもつねね鐘は声ぞ　右大将方

千 うちならす鐘は声にもあはれにて秋ものねせとへなひ知らん　慶範

勅 暁は鐘ぞあはれに打ちそふる浮世の夢のさむる枕に　宗経

全 鐘の音はなにとぞ情らるらん今はへそこの空にて暁このそら　隆衡

千 あかつきの鐘のさびしき鐘の音は心の底にこゑてぞきく　円位

新 暁とたのめのまくらをそのつれの鐘のおとかれ　俊家

晩鐘

薄暮鐘

寒鐘

遠鐘幽

鼎

書

拾 山ゐる月入れのうゝ月秀ごとかそてそれぬとちぞうゝき　さゝ人
新 まゝれ法る入れの遠ち者すもあすもゝ行ゝべちんとすん　西りゝ
代 みるまゝふんがそくゝ行ゝそれ入れのうゝてつきそそ行ゝり　山田ゝ
後拾 さゝあくてゝ祢らんぬ拾といとゝゝくつき者ゝ遠ち者ゝ　いろこそ物
拾 ち法せ山あゝゝち者のとかそれゝ者ゝてゝぬ遠の者ゝか　ち者助
新 神風やとよみてゝゝふかゝゝゝくゝゝそあゝゝとゝゝゝゝゝ　太上天皇
古 神世月時百ちゝるゝゝゝゝち者の者ふゝち者ゝゝこれ　ち者東
同 ちゝれん時ゝゝゝとゝ濱ゝ者りゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　濱人ゝ者
後 ちゝそ山峯のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　愛ゝ
拾 菊ちゝ者ゝき者ち者のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　ち者ち者
同 ゝゝれちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　補雅
後拾 ち者のゝゝ者者のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　補雅
同 ゝゝずゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　康資王母
同 一琴ゝちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　恵慶ゝ

勸學文

文書

本

文詞

金 家ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　弘補
同 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　太政大臣
初 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　俊憲
新 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　牧馬
同 濱ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　任白川院
同 洲ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　国房内侍
初 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　羅ゝ
古 かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　よみ人
代 家ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　中務
後 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　稚淑
後 者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　右政大臣
同 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　今上ゝ宴
後拾 いゝゝ一の家ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　新勅
新 ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　ち行ゝ

月　ひとごとに光さすめる玉の緒せゝ乱れ染いむの春せゝ　光ひとぞみる　左佐内侍
雪　袖の風ふくとりあしかこの花のかをいそぐらん　三河
月　昔よりいかなる袖の風かれぬ春をおくれぬ花の色えせざる　宗子
月　年ごとに春ぞかきこもむりしお染むもかれる袖をすれ　通俊
月　数そへて時雨のうつりをせ染いめづらしぐ色ぞ　法性寺
月　ちぐさに春とやいひつゝ染いまぐ秋をぬいちぬすと　源雅
月　すさのみそぎぞらする人いづもちやをてきらん　実助
代　ゆくこるきあるんの来こえてみくづふとまるこゝたしかし　海之
月　袖の風きこえかぐさぐふれいきまふるもきてつぐま　明雅
月　きみぐこめたぐらつれもち巻きぬさはるさとぐいあ　ちみ人
いろふすらんだよゝん　せどうう
月　ゆきの人の袖つゝ衣秋緑ふるひるろてこるまどの雲　家相
月　紅の色を黒ふ世のまろもそすれる衣の雲をゆく　後人
月　夕されば秋風さゆるぐるまがとれわゝ衣りそふきこ月

月　ゝゝ行ふひさきまりがあき衣かゝれまをひい作うゝ衣ん　月
南　うせのとをやをきこゝ紀とがきせて衣くすのぐらまよひきこ月
古　塚の羽ちよ命の衣いうすゝんどうろがゝゝ白ひぬふ　友則
月　山吹の花ぐろとぬゝやゝれとぐゝろてゝずにかゝ　そせい
後　花ぐのあゝの紀ちぐめまうかれかろをこゆる衣う　大輔
月　ゝる岩のうゝろ衣うちきてまこふろと巻ゝれぬる　ねり
拾　さいぐふ衣ハすゝん巻ゝれどうろひぐゝ海く海ていハ　ちみ人
後拾　神代ゝうすゝる衣といひあぐゝみきねてやづゝきふ　選子
金　長まんとゝゝんゝゝろゝれどちぐ巻神せづゝれふ　仁覚
野　うゝ衣紀の秋ふぬぎうよ家ゝそ巻ゝれをてゝちゝ　法性寺入道
月　袖扇衣ゝちうゝぬる巻ゝれ紀ふいぐゝ紀ゝ巻をみるぐく　東門院
後　巻ゝさゝ紀ゝ巻ゝふ巻ゝ衣きハゆゝまで社ゝれゝゝれ　宗家
後　巻ゝゝふ紀〇をすれがいと巻ゝ巻ゝ巻ゝれふをん　小町
月　世ぞそ巻く巻ゝ衣ハゝぐひとゝゝるゝがうゝゝいざゝゝらん　通俊

襲　羽衣　裳　綿　鏡

野　石つゆのあしたゆふべさはくらの若草にはいとさうず　如覚ハ
千　おかりかくうきぬの氏ふかをかうつ松は墨流のそで　慈恵ハ
同　たくたこりうきやうきこや寄うつうきこん松と法花経と　法成寺道
同　ちあづとう袈裟あれえ寄ぐさる法の衣を豆ちくれあや　ゑ任
初　墨染の玉とあんとあんとあんと

杖 細 籠 鍋 玉 金

六 みちのくにたちこまの中なる木の枕いわんど君がはまくら　よみ人
拾 逢坂をたゝき越えんばかりのみちをたゝきなれる杖也　同　意吉広
万 大宮の内まできこゆあびきすとなのごとくなる麻のよび　山部赤人
古 ひぐれのとぐらやいぐらこよろぎの波の沼なる沖小船　経国
拾遺 ちはつかたくまもの秋のくもゐ雁つる声の聞くまで　家持
万 白玉をつゝみてやどわやも業乾懸りまゝにねくだね　読人
同 ちゝ玉いとぬきしかたとはしれをとまこぬきつゞむ小さん　同
同 しら玉をとぐえいまこと古れどてきぬ又ぬきしかもいかゝ　同
同 妹ぐ先ゝれむりと思ひきこゆる古ゝむ長こ沖つ藻み　同
同 えゝ世ばをき物ゝ波ぐれぐまゝ玉をとゞかやまぐ　笠金村
同 磯のゝ小つまおれゝきこゆるとゞかぐきこゝ白玉　よみ人
古 松しやまんとぐ白玉いかゝ小さゝぐ玉とゝ　河原左
後 うゝねの森小とまれる白玉ぐ玉まつる高玉ぐ　よみ人
万 すゝろぐの出代さえんとわづまゝ玉ぐ花ゝ　家持

鐙 陶中灯 画 車 畳 梁 松

物 ふる雨小ちぐ代光ゝ入ゝ入れぐ光ゝ入ゝ入れぐ光ゝ入ゝ入れぐ　東三条院
物 ふれのゝと成ゝ入ゝ新ゝ入ゝ入ゝ入

船路

海路舟

江上舟

浦舟

河舟

古渡舟

舟過芦間

行舟夜已深

野 多里ら矢ぐら波のわたるこゑぞ〜づんまき　慈武ヲ
代 ゑ〜ぬ日ハねさとまれ舟人のとゐ〜ぬ沖ハ風むく〜　安清
同 ものつ沿ゐ〜ゑ舟ぢ〜ぬ　為有
同 波多くあさうれうの遠風よかぜて吾わ〜ず出る舟人　惟範
万 さ長文て漕ぎぐ〜ある杉ら舟ゐ〜ぬとゐ〜みをよみゐ　ゐみ人
後拾 すぎぢぬ出る柚ハ苔まふ塩ぬのおどつ舟ぢ少ゑ　国行
代 沖つ沿ゐ〜の浦ハ風ぬ波ぬ舟ぢ　教孫
同 むゐの海ぬ沖のゐ〜舟をゐんで去さそ〜あるあぐのよび　ゐ納言
万 塩ゐ〜ゐみ立ぢ〜ゐ舟さすゐ〜ものとゐ八川のせまを　ゐ人
野 熊野川ぐすゐ舟のみ舟ぢをさすぐゐ舟ぬ海の舟ぢ　太上
代 つ舟ぢ〜ゐ舟の下ぬ海ゐ舟ゐ〜ぬ海の川岸　後宗拾
同 海原きゐぐぬ海のゐ〜ゐ舟ぬ海ぬ岸のふ舟ゐ〜きぢ　函り
同 難波ぐ〜ゐ〜の舟ぬ海ぬ海ぬ舟ぢ　ゐ〜ぬ
万 ゐんのゐ〜ゐ舟ハ〜ぐとゐんで沖ぬ〜のゐ〜ふかぬの舟ゐ　ゐ人

筏

杣川筏

河筏

釣

釣魚

釣舟

漁舟

漁舟火

漁火遥浪

後拾 海きせ人手筏しの流ぬよりて牧ゐの舟ぬ舟ぢ　同
代 いゐ〜ふ〜ふ〜杣川のみをぐ〜ものゐ舟ぬ舟ぢ　後拾
同 大井川みをさゐまく岩瀬ふゐ〜ぬ筏の立ぐゐのよ　よみ人
同 浦ぬぎふつのゐ〜ものとて立る我ぢ〜ゐ舟ぬ立ぢ沖つ〜波　為家
同 ゐ〜ぬ〜ふすぎ流ぢ〜ゐ〜夕波のひゐ〜の浦ふ舟ぬ舟ぢ　為家
万 風ぢ〜ゐみ沖ぬ白波ぬ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ　用兄麻呂
子 いたゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ　後宗
万 むこゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ　人麿
代 夕波ふ柳ぬ小舟ぬ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ　重之
ふ ゐ〜ゐの浦ぬ舟ぬ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ　後撰
万 ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ　よみ人
六 大井ふ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ　貫之
物 夢ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ　幸清
万 きの國のゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ　後人之

漁舟遠漁
遠望漁舟

暮漁舟

眺望

夕眺望
朝眺望
海上遠望
海上眺望

海辺眺望

浦眺望

船中遠望
海路眺望
雲海漫々
河眺望
潮上眺望
野径眺望
遠山眺望
峯眺望
月前眺望